高齢地区における地域愛着感を醸成する地域環境の特性について

安　思奕[1]・青木　俊明[2]

[1]学生会員　東北大学　国際文化研究科（〒980-0857 宮城県仙台市青葉区川内４１番地）
E-mail:ansiyi1206@yahoo.co.jp

[2]正会員　東北大学准教授　国際文化研究科（〒980-0857 宮城県仙台市青葉区川内４１番地）
E-mail: toshiaki.aokia1@tohoku.ac.jp

本研究では，高齢地区において，地域愛着の形成に影響を与える環境特性を明らかにすることを目的とする．その際，地区の居住利便性によって愛着が影響を受けることを想定し，利便性の高群と低群に分けた上で地域愛着の形成構造を検討した．まず，宮城県内６５歳以上人口が半数以上の小地区を対象地区とし，郵送調査法を行った．その後，居住利便性に対する評価の高い地区と低い地区に分け，地区ごとに回帰分析を行った．その結果，地域愛着を形成する環境要因は，両地区共通のものと，地区によって異なるものがあることが分かった．共通となったのは，物理的環境である地域資産の魅力性だった．異なったものは，社会的環境である信頼感と近所付合いだった．高群では，近所付合いが地域愛着有意な影響を及ぼす一方で，低群では信頼感のみ有意であった．このことから，高齢地区における地域愛着を高めるためには，物理的環境と社会的環境をともに備える必要がある．特に，歴史風景の宣伝，安全感を与える地域風貌，また公信力を持つコミュニティの場を設けることの重要性が示唆された．

Key Words: *place attachment, aging communities, the convenience of residence , immobility*

1.　はじめに

少子高齢化に伴い，生活の質が懸念される高齢地区は都市内外で増えている．こういった地区では，地域の担い手が不足し，コミュニティの維持が困難になるなど，人口減少による様々な課題に面している．二地域居住策なども提案されているが，十分な効果が得られているとは言い難い．そのため，効果的な人口増加策や定着策が求められていると言える．

ところで，近年では，高齢・過疎地区住民の居住意思決定を把握する研究が多く見られる．代表的な研究として，有川らや丸谷らなどが挙げられる [1)2)]．これらの研究では，高齢・中山間地区では，不便な生活環境であるにもかかわらず，定住意向を示す住民が一定程度存在することが報告されている．その理由として多く報告されているのが“地域への愛着”である．

地域愛着(place attachment)とは，人と場所を結びつける情緒的感覚を指す [3)]．愛着が醸成されることにより，地域は人にとって意味を持つ（meaningful）場所になりうる．居住意思決定においては，地域愛着が高いと居住継続への意欲が強まるため，地域愛着は居住継続を促す心的要因の一つとも視される [4)]．そのため，日本の高齢地区では，地域愛着は経済的要因以上に，居住意思決定の重要要因であるとも言える．すなわち，住民の定住促進を図る際，地域愛着の醸成が重要となると言える．

地域愛着の形成に関する研究の例としては，引地・青木が挙げられる [5)]．引地・青木は，地域への愛着が，物理的環境と社会的環境の２側面から形成されることを示唆している．その際，社会的環境の影響がより大きいことも示されている．また，鈴木らは，地域の風土など，個別要因が地域愛着の形成に与えた影響を検証している [6)]．これらの研究では，愛着の形成構造に関して基礎的な知見が提供されているが，具体的な形成要因や地域特性の影響については十分に検討されていない．

高齢地区における地域愛着の形成策を探る場合に，地区特性について考慮する必要がある．高齢地区では，生活関連サービスが低下する場所に位置するものがある一方で，比較的便利な市街地に位置するものもある．居住の利便さに関して，地区間に大きな違いが見られると言える．このような地区差を考慮せずに地域愛着の醸成策を図ることは，現実離れの可能性が考えられる．そこで，本研究では，居住利便性という地区特性に着目し，地域

愛着の形成構造の相違を検討する．具体的には，以下の 2 点を目的とする．それにより，高齢地区における持続可能なまちづくりに資する知見を得ることを目指す.

・居住利便性の高さが地域愛着の形成構造に与える影響を検討する.
・地域愛着の形成構造を踏まえ，地域特性を考慮した愛着醸成策を検討する.

2. 理論フレームと仮説

(1) 地域愛着の形成と地域特性

地域愛着は，人（person），心的プロセス(psychological process)，及び地域(place)という多側面にわたる概念である [7]．人の側面には個々人の経験などが含まれており，心的プロセスの側面は，人の誇り感や認知などが強調される．本研究では，物理的環境と社会的環境が含まれる地域側面を検討する [7].

物理的環境には自然や建築など含まれ，社会的環境には社会的繋がり（social ties）などが含まれる [8]．両者が地域愛着に及ぼす効力について，Lewicka は，社会的環境が最も地域愛着に影響を及ぼす知見を多く取り上げた一方で，物理的環境の影響力の優位さを主張し，自然環境に対する評価を強調する研究もある．しかし，このような知見に不整合が生じる理由については明らかになっていない [3].

一方，地域愛着の強度や構成が変化する農村や都市，また地域危険性の有無などによって変化する知見がある．Lewicka は，農村と都市の家と地域水準で地域愛着の構成を分析した結果，居住地と森林火災可能性の有無によって，地域愛着の構成が変化することを報告している [8].

このことから，地域特性を加えて，地域愛着の形成構造が変えうることが考えられる．そこで，本研究で地域愛着の形成構造を分析する際に，居住利便性を統制条件として取り上げる.

(2) 居住の利便性と地域愛着

居住地は，人間普段の買い物，地域コミュニティや通勤など，生活活動の拠点である．居住利便性の高い地区では，交通機関や生活施設が充実しているため，住民は基本的な生活ニーズを満たすことができる．人のニーズや目標が地域を介して満たされること，愛着感も醸成される．このように形成した愛着は，地域依存（place dependence）と呼ばれている [3]．このことから，居住利便性は，地域依存の形成を物理的側面から促す機能を持つため，地域愛着の醸成に関与していると言える.

しかし，本研究では，物理的環境と社会的環境が愛着形成に与えた影響を比較するため，居住利便性を統制変数として，その他の物理的環境と区別する必要がある.

そこで，本研究では，さらに物理的環境が地域愛着の形成で果たした機能に着目しつつ，さらに分類を行った．Gustafson は，自然環境や建築といった物理的環境が地域に意味をもたらすことを報告している [9]．例えば，家屋の建造や修繕などで愛着が形成される．これらのことを踏まえれば，物理的環境は，人のニーズを満たすルートに加えて，環境に「意味」を与えるルート，という２つのルートで地域愛着を形成すると考えられる．そのため，本研究では，物理的環境の代表的特徴として居住利便性に着目し，それが愛着の形成に与える影響を検討する.

(3) 本研究の仮説

地域依存に示されるように，場所はニーズを満たすことにより，愛着の醸成に貢献する．そのため，ニーズが満たされにくい場合には，地域の愛着も醸成されにくいと考えられる．したがって，居住利便性が低い地区では，物的ソースが不足するため，仮説１を措定できる.

仮説１： 居住利便性が高い地区の住民は，それが低い地区の住民に比べて，高い地域愛着を持つ.

既存研究が示唆するように，地域愛着は，物理的環境と社会的環境の両方から正の影響を受けると考えられる．自然環境，歴史風景などの物理的環境は，地域景観の一部分であり，居住利便性との関係は小さい．利便性の低い地区であっても，地域風景が優れていれば，物理的環境は高く評価される．そのため，仮説２が措定される.

仮説２: 居住利便性の高さにかかわらず，物理的環境に対する評価が高いほど，地域愛着も高くなる.

一方，社会的環境も地域愛着を高める．ただし，社会的環境も居住利便性の影響を受ける．例えば，French らが示したように，歩きやすい近隣環境は，近隣コミュニティでの外出を促進する．その結果，コミュニティ感覚(sense of community)の向上に繋がる [10]．このことから，居住利便性は社会的環境を通じて地域愛着を高める可能性もある．逆に，居住利便性が低い地区では道路の不整備でコミュニティ行動が制限されており，結果として愛着の醸成も困難となる可能性がうかがえる．すなわち，居住利便性の低い地区では，環境を活性化できる物的ソースが不足するため，愛着形成が低くなる．そこで，仮説３が措定できる.

仮説３: 居住利便性が高いほど，社会的環境を通じて，地域愛着も高まる.

表-1　調査項目

調査変数	構成概念	質問文	α係数
地域愛着	地域アイデンティティ	この地区は、気持ちの中で自分の一部分になっている。 自分にとって、この地区は大切な場所である。 私にとって、この地区は特別な場所である。 この地区に対して、愛着を感じている。	.97
	地域依存	この地区が好きだ。 他の地区に住むより、ここに住んだ方が幸せだと感じる。 この地区には、たくさんの大切な思い出がある。 ここでの暮らしに対して強い愛着を感じている。	
物理的環境	地域資産の魅力性	この地区の風景は美しいと思う この地区には、魅力的な歴史がある。 この地区のお祭りは魅力的だ。 この地区には、残すべきの伝統的文化がある。	.86
	安全性	犯罪の心配があまりない。 交通事故の心配があまりない。 自然災害の心配はあまりない。	.76
社会的環境	信頼性	同じ地区に暮らす人々は信頼できる 助けが必要なときには、近所の人に頼める。 この地区では、自分の利益のために他人を利用する人はほとんどい	.81
	互酬性	近くに困っている人がいれば、できる範囲で援助したい。 困ったときは、地区の中でお互いに助け合うべきだ。 自分が困たときに、近所の誰かが助けてくれる。	.84
	お付き合い活動	近所の人との交流の頻度 地区イベントへの参加状況	
個人変数	土着性	自分は土地の習慣を重んじるほうだ。 先祖が代々暮らしてきた土地に住むべきだ。 祖先の墓を守っていくべきだ。 家族は一緒に住むべきだ。	0.8
		年齢、性別、居住年間	

調査項目	α係数	評定値 higher M (SD)	評定値 lower M (SD)
居住利便性			
医療サービスを受けやすい。 福祉サービスを受けやすい。 生活必需品の買い物をしやすい。 仕事先に通いやすい。 学校や塾、習い事などに通いやすい。 バスもしくは電車の本数が十分だ。 家からまちなか（地区の中心部）に行きやすい。 バスや電車といった公共交通を利用しやすい。 外出する際の交通手段に困ることはない。 日常生活の中で、どこに行くにも大きな不便はない。 外出する際に特に困ることはない。 自宅付近では、急な坂の道などによる不便はない。	0.96	3.96 (.33)	1.41 (.27)

$M_{居住利便性}$＝2.65，$SD_{居住利便性}$＝1.31

higher=$M_{居住利便性}+SD_{居住利便性}$，lower=$M_{居住利便性}-SD_{居住利便性}$

表-2　高低群に見た居住利便性の評価値

3. 研究方法

(1) 調査概要

上記の仮説を検証するために，本研究では，2018 年 11 月 19 日（月）から 11 月 29 日（木）にかけて，郵送法による質問紙調査を行った．調査対象は，宮城県内における 37 か所の高齢地区に住む全世帯とした（地区範囲が指定できない地区を除き）．

本研究では高齢地区を 65 歳以上人口の割合が 50%以上の小地区とした．具体的には，27 年国勢調査の宮城県小地域集計データの「年齢（5 歳階級），男女別人口，総年齢及び平均年齢（外国人－特掲）－町丁・字等」を用い，町丁・字単位で 65 歳以上人口が 50%以上の地区であれば，対象地区として選定された（津波被災区と介護施設所在地区を除いた）．全 1223 通を配布し，有効回答者数は，383 名（男性 209 名，女性 118 名）で，回収率は 31.3%であった

(2) 調査項目

「地域愛着」の測定項目は，愛着測定の際に最も多く用いられている Williams らの項目を踏まえて作成した[30]．Williams らの尺度では，地域愛着を「地域アイデンティティ」と「地域依存」２水準に分けている[11]．ニーズの満足で得られる地域依存に区別し，地域アイデンティティとは，地域特性が住民の人々の自己アイデンティティの一部になっていることを指す．地域愛着の測定項目は全 8 問で，五段階評価で回答を尋ねた．

物理的環境としては，「地域資産の魅力性」と「安全性」を尋ねた．既往研究に触れた自然環境や歴史文化の他に，日本の高齢地区では，お祭りも文化的な魅力を持つ資産の 1 つとして思われる．そのため，地域文化由来の伝統的文化，歴史，風景及びお祭りの 4 つについて，住民が感じた魅力性について尋ねた．一方，居住地を安全であると認識するほど，そこから感じるリスク感も下がる．地域に対する安心感を把握するため，犯罪，交通と自然災害に対する不安感について，全 7 項目を 5 件法で尋ねた．

社会的環境については，「信頼性」，「互酬性」，近所とのお付き合い及び地域参加の頻度を尋ねた．これらは，「ソーシャル・キャピタル（SC）」の測定にも用いられている．SC を取り上げたのは，それが社会的資源の貯蔵形態を把握できるためである．その質問項目は，伊丹らを参照し，全 8 問で 5 件法で計測された[15]．

個人属性については，地域愛着の予測上で最も影響力が大きいと予想される居住年間を尋ねた[3]．また，日本では，家や土地は，一族として先祖から継承するものと考えられることを踏まえれば，それらには単なるモノとしての位置づけ以上に特別な意味が付与される．この土地や家と先祖を含めた一族をつなぐ特別な感情を“土着性”と呼べば，土着性が強いほど，家や土地への特別な感情も強くなる．そこで，土着性についても，全 4 問で 5 件法で計測した．5 段階評価は，「全くそう思わない=1」から「強くそう思う= 5」とした．詳細な質問項目は表 1 に示す．

(3) 居住利便性と高低群の区分

居住利便性を高低の二群に分けるため，居住利便性に対する評定値のベースを用いて，平均値±標準偏差（m+SD = 3.63, m-SD = 1.84）で分類した．高利便性群には平均評価値が 3.63 より大きい回答者が抽出され，低利便性群には，平均値が 1.84 より小さい回答者が抽出された．結果的に，高利便性群は 53 名，低利便性群は 56 名であった．

また，高利便性群における居住利便性の平均評定値は，3.96 であり，低利便性群では 1.14 だった（表- 2）．ANOVA を行ったところ，居住利便性（t（107）= - 43.84, p=00**）は両群間に有意な違いが見られた．したがって，両者は利便性評価において十分に異なると言える．

4. 結果

(1) 居住利便性別に見た地域愛着と地域環境への評価

a) 高低群に見た地域愛着とその構成

まず，居住利便性別にみた地域愛着の評定平均値を図-1 に示す． ANOVA を行った結果，高低群による「地域愛着」（F (1,107) =8.88, p =.00***）の評定値の違いについて有意が見られた．高居住利便性群の評価値は 4.0 であった一方で，低群の評価値は 3.2 だった．高群の地域愛着は低群より高かった．この結果から，仮説 1 が支持されたと言えよう．

b) 居住利便性別に見た地域環境への評価

居住利便性による地域環境に対する評価の相違を把握するため，各変数の平均評定値を図-2 に示す．各変数の平均評定値を見ると，高利便性群ではいずれも 3.0 を上回り，全て肯定的な評価であった．低利便性群でも，安全性（m = 2.5）を除けば，全体的に肯定的評価であった．

さらに， 6 つの変数の平均評定値を用い，居住利便性の高群別で ANOVA を行った．その結果，物理的環境である「地域資産の魅力性」（F (1,107) =7.86, p =.01*）と「安全性」（F (1,107) =10.97, p =.00**），また社会的環境である「信頼性」（F (1,107) =11.79, p =.00**）と「互酬性」（F (1,107) =6.98, p =.01*）の評定値において，有意差が認められた．いずれも利便性高群は低群より有意に高く評価していた．特に安全性と地域資産の魅力性である物理的環境では，グループ間に大きな差が見られた．

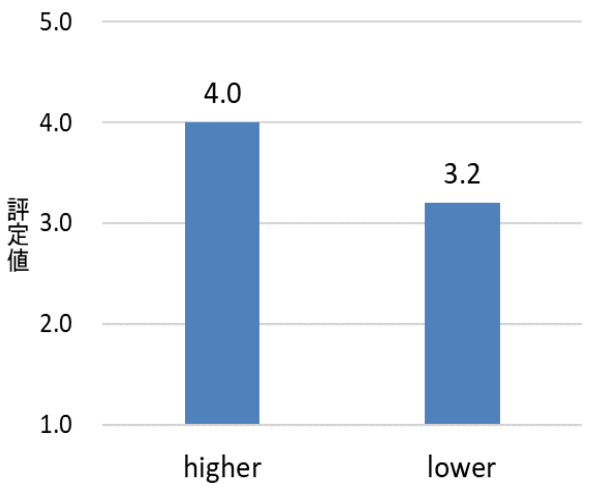

図-1　居住利便性別に見た地域愛着の評定値

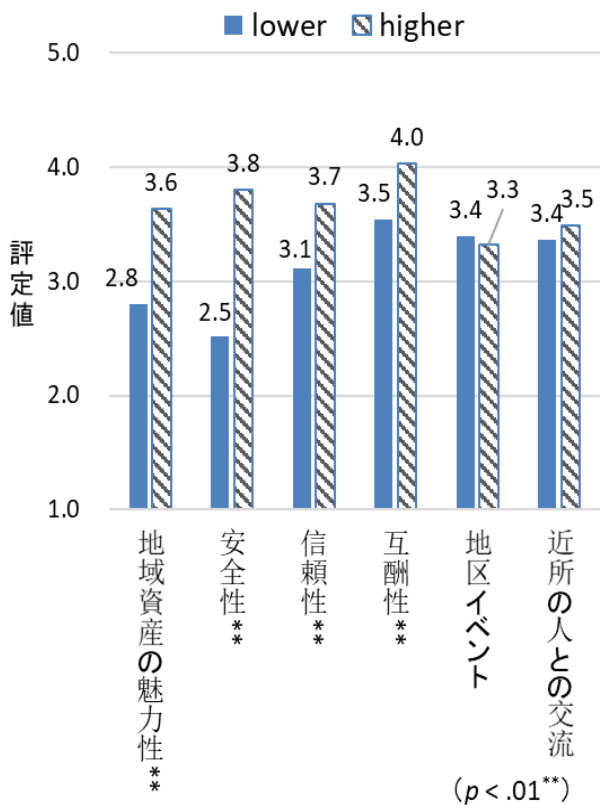

図-2　居住利便性別に見た地区環境変数の平均評価値

これより，居住利便性の高低は地域における物理的環境の整備に関わることが示唆された．その一方，社会的変数の平均評価値を群間で比較すれば，同頻度の地域イベントの参加と近所付合いが行われたとしても，得られた信頼性と互酬性が異なっている．このことから，信頼性と互酬性に対する評価は，居住の利便性の低下により，低下される可能性がうかがえた．

(2)　居住利便性別に見た地域愛着の形成構造

各変数と地域愛着との関連性を検討するため，相関分析を行った．結果を表-3 に示す．表-3 より，安全性以外のすべての変数で，地域愛着との間に有意な相関が見られた．安全性に関しては，高利便性群では有意な相関が見られたが，低群では見られなかった．また，土着性については，利便性の両群に土着性と愛着の間に有意な相関が認められた．一方，居住年間については有意な相関は見られなかった．この結果は，Lewicka が指摘した居住年間が地域愛着の形成に与えた影響は，住み始めた最初の何年間が最も強かった現象を反映できる．両群の居住年間（高群＝45.19，低群＝39.67）の平均値を見ると，いずれも長年で住んだ住民が多かった．このため，住民間の繋がりも定着しており，地域愛着が居住年間の増加によって高まる傾向も薄くなると言えよう．その一方，土着性が地域愛着と強く関わることが示された．これより，先祖の土地などに対する態度も地域愛着に関わることが示された．

群間に各社会的変数と地域愛着の相関係数を比較すると，以下のような結果が得られた．信頼感，互酬性などと地域愛着の関わりに関して，利便性低群が高群より強かった．その一方，近所付き合いと地域愛着の関わりに関して，利便性高群では強く見られた．このことから，地域愛着に関連する社会的変数は，居住利便性の高低によって，コミュニティの質かコミュニティ行動に移る可能性が示唆された．

(3)　居住利便性別に見た地域愛着の形成構造

居住利便性による地域愛着形成の相違を把握するため，重回帰分析を行った．結果を表-4 に示す．

表-4 から，居住利便性を問わずに，物理的環境と社会的環境ともに，地域愛着の形成に参与することが分かった．まず，物理的変数について，地域資産の魅力性は両地区ともに地域愛着の形成を促すことが示された．それに加えて，群を問わずに同程度の説明力を持つことが分かった．これより，仮説２が支持された．一方，社会的環境について，高利便性群では，近所付き合いが愛着の形成に参与する一方で，低群では，信頼性が参与することになった．このより，仮説３が支持されたが，居住利便性の高低によって，愛着に及ぼす社会的環境の構成変数が異なることが分かった．

さらに，群内で見られた物理的環境と社会的環境による影響力を比較した．高利便性群では，物理的環境の影響力は社会的環境より説明力が強かった．その一方，低利便性群では，社会的環境は物理的環境の説明力が強かった．この結果から，居住利便性の高低によって地域愛着の形成構造が変わることが示唆された．さらに，それは社会的環境によって調整されることも示唆された．

表-3　物理的変数・社会的変数・個人属性と地域愛着との相関

測定変数	*1*	*2*	*3*	*4*	*5*	*6*	*7*	*8*	*9*	*M*	*SD*
1. 地域愛着	—	.52**	.29*	.45**	.33*	.34*	.47**	.37**	.19	3.98	0.71
2. 地域資産の魅力性	.56**	—	.39**	.43**	.53**	.26	.42**	.44**	.07	3.63	0.71
3. 安全性	.22	.18	—	.10	-.02	.10	.14	.07	.01	3.80	0.64
4. 信頼感	.59**	.38**	.37**	—	.76**	0.24	.41**	.48**	.20	3.68	0.62
5. 互酬性	.47**	.31*	.38**	.82**	—	.23	.36**	.45**	.07	3.54	0.82
6. 地域イベント参加	.27*	.02	-.19	.38**	.30*	—	.53**	.39**	.13	3.32	1.34
7. 近所付き合い	.34*	.19	.03	.46**	.56**	.54**	—	.29*	.36**	3.36	1.08
8. 土着性	.53**	.43**	.18	.46**	.49**	.13	.37**	—	.15	3.58	0.79
9. 居住年間	.10	-.06	-.13	.21	.17	.42**	.39**	.16	—	45.19	22.37
M	3.15	2.80	2.52	3.11	3.54	3.40	3.36	2.89	39.67	—	—
SD	1.05	0.98	.0.89	.096	.82	1.12	1.08	0.69	22.46	—	—

注.斜線の上は居住利便性高群の相関係数を表す。斜線の下は居住利便性低群の相関係数を表す。
縦列で表記した平均値と標準偏差は居住利便性高群で、横列で表記したのは居住利便性低群の数値である。

表-4　地域環境が地域愛着の形成に与える影響

	居住利便性	
	higher	lower
変数	β(t)	β(t)
固有値	(3.95)	-0.965
物理的環境		
地域資産の魅力性	.40**(3.08)	.40**(3.67)
社会的環境		
信頼性	-	.43**(3.82)
近所お付き合い	.28*(2.02)	-
個人属性		
居住年間	-	-
R^2	0.34	0.45
F	8.55**	16.07**

*p<0.1.**p<.05.

5.　考察

(1)　居住利便性と地域愛着の形成構造

本研究では，地域愛着の形成に関して，物理的環境が引地・青木が示した以上の影響力を持つことが分かった．その理由は，高齢地区の住民は高齢者が多く，伝統的な文化や歴史を重視する人が多い可能性がうかがえる．こう言った住民に対して，地域の文化自然資産はより魅力的に見える．

その一方，社会的環境は，先行知見に示したよう良い説明力を持つが，居住利便性の区分により，その構成変数と影響力も異なることが分かった．利便性の高い地区では，近所付合いによる影響が見られたが，利便性の低い地区では，コミュニティ行動自体とは関係せずに，コミュニティの質である信頼感の説明力が高かった．この結果から，基礎的生活のニーズが満たされた場合，住民はコミュニティ行動を用いて地域愛着を醸成する．それに対して，満たされない場合，住民が社会的環境に対する評価基準は，実際に行った行動から行動の質に変動したと言えよう．

こういった違いが生じたのは，「危険感」という主観的感覚が間接的に作用したと考えられる．Bjornstrom らは，不利な地域環境は信頼感とは負の相関を持つことを示した[13]．その理由は，不利な地理環境は不秩序かつ社会的制約力が欠如している危険感を居住者に与えるため，結果的に信頼性の低下を及ぼす．本研究の結果をみると，安全感（$M_{低群-安全性}$＝2.5，$M_{高群-安全性}$＝3.85）は居住利便性の低群では相対的に低い評価が得られた．それに加え，居住利便性の低群のみ信頼感とは有意な相関が見られなかった．このことから，低利便性地区では，地域から得られた不安感により，信頼性の構築が難しくなるため，より住民に重視される．そのため，地域愛着を醸成する基準が社会的環境の質になったと解釈できよう．

その一方，利便性の高い地区では，危険的に影響させる可能性が薄く，信頼性も比較的に高い．このため，一定的なコミュニティ行動が成立する次第で，愛着を形成する切っ掛けになるだろう．1 点注目すべきなのは，利便性の高い地区では，信頼性とは有意な相関が見られたコミュニティ活動は，近所付合いのみであり，地域イベントへの参加は有意ではなかっあ．このことから，地域におけるすべてのコミュニティ行動が愛着を高まるとはいえない．地域イベントへの参加は，グループ活動を通して地域アイデンティティを高める可能性が示唆されたが，地域内成員間の繋がりを強められるとは言えない．反して，信頼感は近所付合いの範囲内でしか見られない．

(2)　地域愛着の醸成策の着目点

以上の考察を踏まえて，地域愛着の醸成策は居住利便性によって着目点が異なる部分のあることが分かった．

まず，両地区ともに地域資産の魅力性を向上する必要性が見られた．すなわち，現地区に持つ歴史的文化に関

する地域とランドマークを宣伝し，住民に誇り感を持たせる策が考えられる．その一方，アクセスしやすいように自然風景資源の開発を進めることが考えられる．

地区別で見ると，居住利便性の高い地区では，近所付合いを促すのが最も有効的に愛着感を高める．居住利便性の低い地区では，コミュニケー行動を促進するよりも，住民間の信頼感をつくることが重要となる．Bjornstromらの提言を踏まえれば，地区では公式的かつ信憑性のあるコミュニティの場を設ける策が考えられる[13]．また，信頼性を底上げするため，住民に不安感を与える地域風貌の改善に工夫する必要があろう．

(3) 本研究の妥当性と疑問点

本研究では，地域愛着を説明する際に，地域環境を表す変数を取り上げた．これらの変数は，愛着の形成に一定に寄与することが分かった，愛着の醸成との前後関係についてさらに慎重に検証を行う必要がある．

また，本研究で主観的な評価でグループを区分した．実際な地域環境の状態を計測しなかった．そのため，個人的な性格等によって得られた主観的な利便性が異なる可能性が考えられる．例えば，同じ地区に住むとしても，ポジティブな面から住環境を捉える住民は，地域に対する評価が全体的に高い可能性が考えられる．このため，本研究で得られた結果は，地域実態に対する観測を含めてさらに検証を行う必要がある．

疑問として，地域愛着の下位概念である地域アイデンティティと地域依存に対する評価の結果は，本研究では概念的な区分が得られなかった．両者には，居住利便性の違いによる，評定値の違いが出ると想定できたが，実際に分析を行う際に有意な差が得られなかった．その可能性は，両者の質問項目は文脈上が似てるが，近く設問した．そのため，回答者にとって区分しにくいと考えられるだろう．

6. 結論

本研究では，宮城県内における高齢地区を対象に，居住利便性による地域愛着の形成構造について比較研究を行った．質問紙調査を行い，重回帰分析をはじめとする統計的分析を行った結果，以下の知見が得られた．

- 居住利便性により，地域愛着の形成構造が異なることが分かった．
- 物理的環境は地区の利便性を問わずに，愛着の形成に対して先行文献以上に大きな説明力をことが分かった．
- 社会的環境について，利便性の高い地区では近所との付合いが地域愛着を促進する一方で，利便性の低い地区では，信頼感が地域愛着を形成することが分かった．
- 地域愛着の醸成策を考える際，地域の歴史文化の重要性を強調することが重要と言える．一方，生活利便性の高い地区では，近所付合いを促す機会を作ること，生活利便性が低い地区では，地域風貌に対する安心感を底上げ，公信力をもつコミュニティの場所を設ける点に注目すべきと言えよう．

本稿では，地域愛着の形成段階に参与する地域環境の効果のみ検討された．地域愛着の醸成にあって，同時に，個々人の経験や記憶や認知等の関与も考えられる．このため，今後の課題として，多側面を分析に取り入れ，愛着の構成構造の細緻化が求められる．

参考文献

1) 有川つばさ，塚井誠人，桑野将司，藤山浩，山田和孝：中山間地域住民の生活利便性が居住継続意向に及ぼす影響の分析，土木計画研究論文集， Vol.26，No.2，pp.383-391，2009.
2) 丸谷和花・石川徹・浅見泰司：郊外都市における高齢者の定住意向と居住満足度についての分析：千葉県柏市を対象としてー，都市住宅学，Vol.84，pp.82－89，2014.
3) Lewicka, M.:Place attachment: How far have we come in the last 40 years？, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.31,pp.207-230,2011.
4) Adams, H.: Why populations persist: mobility, place attachment and climate change. *Population a*nd *Environment*, Vol.37,pp.429-448,2016.
5) 引地博之，青木俊明，大渕憲一：地域に対する愛着の 形成機構ー物理的環境と社会的環境の影響，土木学会 論文集 D, Vol.65, No.2, pp.101-110, 2009.
6) 鈴木春菜，藤井 聡：「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究，土木学会論 文集 D, Vol.64, No.2, pp.179-189, 2008.
7) Scannell, L., & Gifford, R.: Defining place attachment: A tripartite organizing framework. *Journal of Environmental Psychology*, 30(1), pp.1–10, 2010
8) Anton, C. E., & Lawrence, C.: Home is where the heart is: The effect of place of residence on place attachment and community participation. *Journal of Environmental Psychology*, 40, pp. 451-461, 2014
9) Gustafson, P.: Meanings of place: Everyday experience and theoretical conceptualizations. *Journal of Environmental Psychology*, 21(1), pp.5-16, 2001
10) French, S., Wood, L., Foster, S. A., Giles-Corti, B., Frank, L., & Learnihan, V.: Sense of Community and Its Association With the Neighborhood Built Environment. *Environment and Behavior*, 46(6), pp.677–697, 2014
11) Williams, D. R., & Vaske, J. J.: The Measurement of Place Attachment Validity and Generalizability of a Psychometric Approach., Miscellaneous Publication, *Forest Science*., Vol.49(6), pp.830-840, 2003.
12) 伊丹絵美子，横田隆司，伊丹康二，佐野こずえ，飯田匡：ソーシャル・キャピタルと住みよさに関する居住者の意識との関係，日本建築学会計画系論文集, Vol.78, No.688, pp.1340-1346，2013.
13) Bjornstrom, E. E. S., & Ralston, M. L.: Neighborhood Built Environment, Perceived Danger, and Perceived Social Cohesion. *Environment and Behavior*, 46(6), pp.718-744, 2014